

「アール・ブリュット・ジャポネ」展が開催された。芸術の都パリで日本のアール・ブリュットが高い評価を受けたことで、国内でも埋もれていた作品を世に出そうという動きが活発になってきている。

これらの概念は、日本ではとりわけ「障害者の芸術」といった狭義のニュアンスで伝えられることが多いが、重要なことはその定義云々にはなく、精神や知的に障害がある人達をとりまく生活環境が、アール・ブリュットが生み出される「制作」環境として、創造的に捉え直されてきた、その思考の発明にある。

私たち、社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団は、2004年から滋賀県近江八幡市にて運営をしているボーダレス・アートミュージアム NO-MAを拠点として、「人間が表現をするということに障害のあるなしの境界はない」ということをコンセプトに展覧会を軸としたプロジェクトを展開してきた。その活動のプロセスで、障害のある人が作った作品の中に、アール・ブリュットという領域で評価される作品があるということを知った。その評価は、「がんばって障害を克服して…」というようなことではなく、本人の持てる創造的な能力がそのまま社会に認められることに

繋がった。そして、そういった社会的承認のみに留まらず、さらには彼ら彼女らの生活・制作・作品は、既存の社会の枠組みに対して実に斬新な視点を提供するものであること、私たちの日常に対する常識的思考を再構築してくれるものとして、大きな可能性を秘めていることに気付かされたのだ。このような気付きを経て、私たちが活動する滋賀県では「美の滋賀」というプロジェクトを立ち上げている。アール・ブリュットを滋賀の福祉の歴史から生み出された美、地域に密着した取り組みの中で輝きはじめた美として捉え、近代美術館の持つ美術資産、仏教美術とともに、その魅力を県民の誇りにすることを目指している。

また、アール・ブリュットの可能性は、福祉や美術といった分野の中でのみ語られるものではない。その可能性は教育や医療、コミュニケーションやスピリチュアリティ、地域づくりなど、社会的にも内観的にも、新たな気づきをもたらすであろう。本企画は、まさにそういったアール・ブリュットが内に秘めた多様性や固有性に着目しながら、ゲストの様々な価値観・視点を編み上げる年間トークシリーズとして構成した。どうぞご予約の上、奮ってご参加いただきたい。